

ここに歴史地理学紀要第八号「明治後期の歴史地理」をお送りする。

「明治後期の歴史地理」は、本学会が一九六五年大会の研究課題としたものであり、本紀要はその発表を中心としている。従来歴史地理学界での研究対象時代は、長らく近世期までを主としていたが、一九六三年本学会大会に「産業革命期の歴史地理」をとりあげて以来、明治以後（近代）についても意欲的な研究が続出し、ここに明治後期の研究論集をまとめ得るに至った。

明治期の著しい社会事象としては、政治体制の変革と外国文明の積極的吸収にともなう産業革命の達成を軸として、全般に急激な変貌がみられた。例えば産業面では、より広域的水利事業の進捗、蚕糸業、綿紡績業、炭鉱業の近代化、鉄道の開通と延長、内外貿易の拡大と港湾の整備、開港場の増設、それに重工業の展開：等々である。しかもこうした産業万般の発達に密着して金融業もまた発達し、産業資本もようやく確立への道を進めていたのである。

序 こうした明治期については、斯学の研究が日なお浅き事情もあって、問題意識というよりも、事

1 実そのものの把握が重点をなすといった傾向が感ぜられないでもなかった。これは如上の研究段階

としては止むを得ないことではあつたが、方法論的吟味が不十分なままに実証作業に入ることは、学問的探究の手がかりをなすという意義をもつてはいるが、ときに体系的研究の推進過程において混乱の因をなしていたことも否めないことであつた。

過ぐる大会においてはこの点についても討議をくり返し、問題意識、資料吟味、量についての構造的把握、そして質的、性格的異同の検討を通じた類型化と発展段階区分、そしてそれらの地域的配置、地域的異同・較差、さらにそうした分布と地域との結合、地域的意義の追及を中核とする方法論が基本的に承認されたのであつた。

本紀要は、こうした問題意識と方法論の討議を経、実証を通じて歴史地理学の本質への接近に努めた労作集である。読者はこれらの成果に対し卒直な意見を寄せられ、歴史地理学の前進発展に対して協力を賜わらう願うものである。

なお、本紀要の刊行につき多大の助成を頂いた畠山文化財団に対して深く御礼を申上げる。